

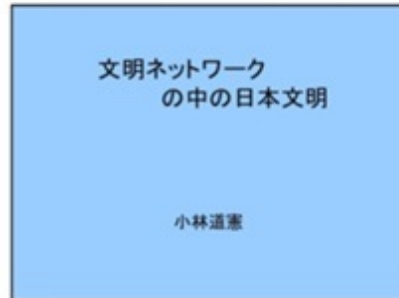


# 文明ネットワーク の中の日本文明



小林 道憲

スライド 1



スライド 2



人類の歴史を鳥瞰してみますと、文明の発展は、ネットワークの発展史だったのではないかと思います。そして、その文明ネットワークの代表的なものを旧石器時代から数えてみますと、ユーラシアの北のほうの森林の道ネットワーク、さらに草原の道ネットワーク、また、いわゆるシルクロードといわれるオアシス路ネットワーク、これらが、ユーラシア大陸の代表的な文明ネットワークとして考えられる。さらに、海のネットワークとしては、東シナ海と南シナ海のアジアの海域ネットワークを考えることができるし、もう一つは、インド洋ネットワークを考えることができる。また、地中海ネットワークも考えることができる。近世になると、喜望峰まわりのネットワークができますが、それらを総称しまして、南海路ネットワークというふうに呼べるかと思います。そうすると、太平洋のことも考えなくては行けないわけで、北赤道海流や黒潮や北太平洋海流によってつくられる北太平洋ネットワークが考えられる。南太

平洋ネットワークは、海流は逆に回っています。こうして、太平洋全体のネットワークを考えることができる。もうひとつは、われわれとはちょっと間接的になりますが、大西洋のネットワークというものが考えられるだろう。そして、そういう多くのネットワークの結節点に生じる文明のひとつが日本文明だとみることができるのではないか、というのが大体の考え方です。

スライド 3



それを旧石器あたりからみていきたいと思うのですが、旧石器から新石器のころの森林の道ネットワーク、これを何に代表させようかと考えたのですが、細石刃をあげておきたいと思っています。これは肉を切る包丁みたいな小さい二、三センチの石器です。これはバイカル湖あたりが起源とみられています。道具の技術も伝わってきているのですが、人も移動してきているのだらうと思います。この森林の道を通して、北方系の文化が旧石器時代から新石器時代にかけて入ってきている。これが、日本文明の基層を形成した。だから、森林の道ネットワークを考えなくてはいけないということがあります。

スライド 4



次に、もう少し下がりました、草原の道ネットワークです。みなさんご存知の通りでありまして、今ここにあげますのは、青銅器で、福岡県福津市津屋崎町今川遺跡出土の銅鑿どうのみです。しかも、これは銅劍かなにかを鑄つぶして、もういっぺん作り直しているらしい。これはかなり古いです。つまり、弥生初期になります。これの起源は、ご存知のとおり、中国の遼寧地方から出てくる胡漢様式の青銅器であります。さらにその源泉は、やはり匈奴が受け継いだスキタイ文化にあります。結局このスキタイが開発した青銅器文化に至りつくわけです。これは、草原の道を通して騎馬遊牧民が伝えてきたもので、朝鮮半島を通して、九州の日本海側まで一番先にきた。これは、日本文明の形成そのものが草原の道に負っているという一つの例であります。

スライド 5



もう一つの例は、鉄ですが、鉄器も青銅器と同じころに入ってきていますけれども、ただその精錬技術そのものは、いつ頃入ってきたのか、弥生の後期のはじめぐらいには入ってきているのではないかというふうに言われています。ここにあげましたのは、老岐島の原はらの辻遺跡出土の鉄槌の頭かぶです。四世紀以前のものです。こういう鉄器やその精錬技術が弥生時代や古墳時代に入ってきますが、これの起源はトルコのところに行きます。トルコで日本の発掘している遺跡ですが、カマン・カレホニク遺跡出土の、こ

これは鋼で、精錬してあります。これは、紀元前二十世紀から十八世紀ころまで遡ると言われています。ここを発掘された大村先生は、もっと実際には遡りうるだろうと仰っています。今のところ、発見されているのでは、これが一番古いわけで、そのあとヒッタイト帝国ができて、そのヒッタイト帝国が紀元前一二〇〇年ぐらいに滅んで、鉄精錬技術がユーラシア全体に拡散していった。それをやはり、スキタイが受け取って馬具なんかをつくる。そしてそれを匈奴が受け取って、中国北部へもってくる。それが朝鮮半島へくる。日本列島にきた。これも、草原の道ネットワークを考えなければならない。

スライド 6



その次は、馬具なんですけど、これは福岡県朝倉市池の上古墳出土の馬具（轡）であります。鉄製です。一時期は、これは日本最古といわれていたものであります。古墳時代の初期のもんです。この馬具の起源も、やはり草原の道を考えなければならない。一番古いところでは、ウクライナ起源（紀元前四〇〇〇年ごろ）といわれていますが、それは十分発達してなくて、やはり後、スキタイなどの騎馬遊牧民が、鉄とのセットで、馬具をつくったりして、騎馬技術を磨いた。これをやはり匈奴が運んで、中国および朝鮮半島へもってくる。そして、日本に入ってくる。それでもって、鉄や馬がそろい、古墳時代を迎えて、大型古墳も作れるようになる。一種の産業革命みたい

なことが起きたわけであります。文明の大きな飛躍が起きたわけです。だから、草原の道ネットワークを考えなければならぬ。

スライド 7



次にもう一つ、ユーラシアを下がります。有名なシルクロード、これを考えたいのですが、この道はシルクだけが通ったわけではありませんので、私は、オアシス路と呼んでおります。代表的なものとして、ガラス器の起源を考えてみたいと思います。たとえば、宗像の沖ノ島にカットガラスの破片が二つ出ております。これと同形のつくりかたのものでは、奈良の正倉院の御物に切子碗であります。もうひとつは、安閑天皇陵から出たといわれるのがあります。こういうのが、日本で出土しています。これとそっくりなのが、イランに出ています。イランのギラーン州に、同形のカットガラスがたくさん出てきております。だから、ササン朝ペルシャのガラス技術が、おそらくシルクロードを通して、今のアフガニスタンやタリム盆地や、河西回廊を通して、中国北部、朝鮮から日本と来たわけだから、やはりオアシス路のネットワークを考えねばなりません。これは、交易とか、外交とか、亡命、そういうものでくるわけです。

スライド 8



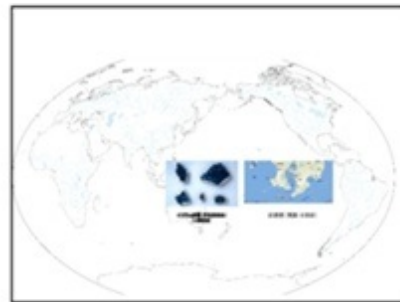
忘れてならないのは、有名なことですが、オアシス路を通して、大乘仏教が入ってきます。インド起源の仏教が、北西インドへ行って、今のアフガニスタンあたりへ行って、ヘレニズムとペルシャ文化とが融合しまして、はじめて仏像ができます。ガンダーラ仏です。いわゆるガンダーラ芸術ができるわけです。だから、仏さんが来ている着物は、ギリシャローマの紳士の正装です。うしろの光背は、ペルシャ起源です。こうやって融合し、それが同じシルクロードを通して、中国、朝鮮、日本へきているわけです。日本海側とか九州の方には、仏教公伝の六世紀前半よりもっと前におそらく来ているであろう。日本海側では、五世紀のころ小金銅仏、これは渡来人がその信仰とともにもってきているのですが、出ています。オアシス路は、この仏教の来た道でもありました。

スライド 9



もう一つの道、さきほど申しました南海路のことですが、まず東シナ海のネットワークを考えたいと思います。それは稲作の伝播以来ありますけれども、ここにあげましたのは、福岡県大野城市仲島遺跡から出ている王莽の貨布です。丸い貨泉は済州島とか、対馬とか、老岐島、それに山陰地方のほうで出ています。大野城に出ているのは、貨布です。それは紀元間もなく、前漢から後漢へいく間、新の時代に王莽が発行したお金です。これが出てくるといことは、東シナ海で物の交換が盛んに行われていたということです。

スライド 10

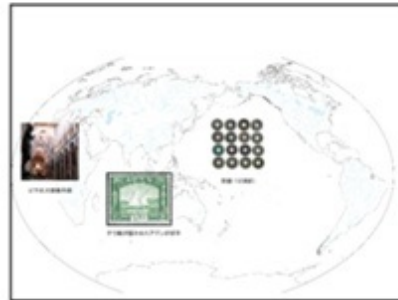


次にあげますのは遣唐使です。遣唐使は、主に南路を通過して、中国南部へ行って、それから長安へいきます。それで、主に鹿児島島の坊の津から出発しています。そのため、坊の津も発展をします。港市としても発展します。次にあげておられますのは、これは太宰府から出土している十世紀ころのイスラム陶器です。陶器というと、大体は、このころは中国起源であります。中国陶器は、南シナ海とインド洋を通過して、イスラム商人が運ぶわけですが、製陶技術もイスラムの地へ伝わり、今度は、コバルトブルーの顔料を入れて、また新しくイスラム陶器をつくる。それが逆に輸出されているわけです。それが太宰府まできている。奈良にも出土しています。なんらかの交易、交流、接触というものがあつたということです。ものの交換、交流です。



こういうものがあつた証拠であります。日本文明は、南海路を通じてイスラムのところまでつながっていくわけです。

スライド 11

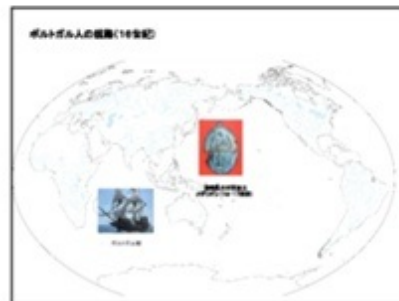


もう少し時代を先にいきますが、ここにあげたのは宋銭であります。平清盛のころを思い出していただくと思います。十二世紀。平清盛の財力の起源は、南宋との貿易、日宋貿易です。広州とか寧波とかを、博多、福原（神戸）と、交易で結んで、貿易でその財力をためこむ。それで都市が発達する、武士階級が台頭してくる、そして荘園制がくずれて、封建制が成立していく。商業の発達、都市の発達、封建制の成立。これが日本で起きる。

他方、こちらのほうにあげましたのは、ヨーロッパの北イタリアのピサの大聖堂で、これだけ立派なものがちょうど同じ時期にヨーロッパでできていくわけですが、よくみればイスラム様式がはいっています。ということは、南海路のところで、イスラムがユーラシアの東西を結んでいるわけです。でありますから、西洋文明と日本文明は、とくに十二世紀に商業の発達や都市の発達や封建制の確立という点で連動し、平行進化しているけれども、実は、両者をイスラムが結んでい

る。つなぐ文明がある。媒体文明と私は言っているのですけれども、それが  
あるから連動しているのだ。そうみな  
なければならない。何の関係もなしに、  
同時発生しているのではないという  
ことです。

スライド 12



次に近世に入ります。ここにあげま  
すのは、十六、十七世紀の長崎の大村  
市から出ているメダリオンでありま  
す。これはご存知のとおり、ポルトガ  
ルが、今度は、イスラムを出し抜いて、  
喜望峯まわりで、インド洋を通過して  
やってまいります。西洋文明が直接や  
ってきたわけですが、これも、しかし東  
アジア海域の交易圏に彼らが参入し  
てきたというふうには、考えた方がい  
いと思います。そういうしかたで南蛮文  
化が入ってきた。

スライド 13



次にあげていまして、オランダか  
ら出ているオランダ貴族の紋章のあ  
る伊万里焼であります。これは、真ん  
中にオランダ貴族の紋章が入れてあ  
る。ということは、オランダ人がバタ  
ビアあたりから、長崎へきて、注文し  
ているわけです。その注文に応じて、  
大量生産している。それをオランダが  
運んで、西洋との交易、交流が成立し  
た。さらに、オランダは、西洋のもの  
ばかりでなく、東南アジア産のものも  
もってきますから、それを買わないと

いけません、それを買うだけのお金が日本にはあった。ここには、石見の銀山の例をあげておきました。たくさんの銀が戦国時代から江戸時代にかけて発掘されましたので、銀で買えたわけです。その銀がヨーロッパへ運ばれますから、ヨーロッパでは、いわゆる通貨供給量が過剰になり、ときどきインフレが起きたりするの、そういうわけです。そういうふうには日本文明も西洋文明に影響しているわけです。

スライド 14



そうしますと、どうしても太平洋ネットワークというものも考えなければいけないことになります。ここにまずあげましたのは、縄文時代後期から弥生時代中期にかけての沖縄県那覇市伊江村ナガラ原第三貝塚から出ているゴウフラ貝でできた装身具ですが、今でいうプレスレットです。プレスレットをつけたまま、葬って、その人骨が出ているわけでありまして、縄文から弥生にかけて、南西諸島は貝の道でもありました。黒潮の道です。黒潮の貝の道を通して南方系文化がきているわけで、これは日本列島に広く分布しています。黒潮ルートの文化のルートが、新石器以来あったことになります。

そうしますと、どうしても、太平洋のネットワークを考えなければならぬわけで、とくに南太平洋から日本列島にきている文化の可能性を考えねばなりません。いろいろなものが考えられますが、代表的なものとして栽培植物を考えると、間違いないのだろ

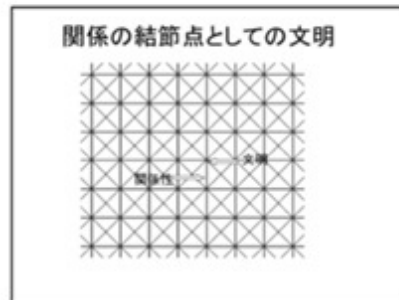
う。南米起源のものですと、トウモロコシ、ジャガイモ、アボガト、唐辛子とかいろいろありますけれども、代表的なものとして、サツマイモをあげておきます。これはコロンブス以前に、すでに南太平洋では栽培されていた。メソアメリカ起源のものが、すでに南太平洋では栽培されていて、それがフィリピン、中国、台湾、琉球、種子島、鹿児島、長崎、平戸に来て、石見のほうへきたと言われています。関東地方で栽培できるようになったのは、吉宗のころで、これが江戸時代の飢えをしのいだ。だから、文明はどんなに遠くにあっても影響してくるわけであります。これは、やはり太平洋ネットワークを考えなければいけない。

ここにあげましたのは、メキシコシティから出ている日本の有田焼であります。大量に出てまいります。十七世紀後半になりますと、大量に出てまいります。ということは、長崎からオランダ人がマニラまで運んだのでしょう。マニラからは、ガレオン貿易で、スペイン人が北太平洋海流を使って、もうこのころは定期航路ができていますので、大量にメキシコに運んでいるわけです。こういうふうに、太平洋ネットワークというものも考えなければならぬ。



そうしますと、人類の文明史をまとめると、いろいろなところでネットワークができるわけではありますが、それを最初にグローバルにまとめたのは、やはりイスラムだろう。バグダードなどは、オアシスの道、インド洋、地中海、すべてとネットワークでつながっております。ニューロンネットワークみたいなものです。少なくともアフロ・ユーラシアで、グローバルネットワークを最初に形成したのはイスラムとっていいだろう。さらに、これを総合して、草原の道ともセットにして、ユーラシアの大循環路を作って商業を発展させたのは、モンゴルです。イスラムやモンゴルのおかげで、日本文明と西洋文明が同時飛躍をしているわけです。最後に海洋主体ですが、ヨーロッパ諸勢力が、このネットワークをまとめ、新大陸をも世界史に巻き込んでいった。そして新大陸なくして、近代文明は成り立たないということにたちにしていった。ということで、人類史を文明ネットワークの発展史としてみる事ができる。その結節点の一つとして日本文明を見るべきだ。

スライド 16



そうすると、文明とは、いったい何なのか、交流という局面だけでみると、交流なくして文明なしと。一つの文明は孤立して、独立して存在しているわけではなくて、あらゆる文明は交流によってつながっている。関係性のなかで生きている。つながりのなかで生きている。だから、一つの文明の中に、あらゆる文明が流入してくる。だから日本文明の中にも、世界文明がある。その文明ネットワークの結節点として、文明を考えるべきだというのが私の考えであります。

---

2014年10月11日

比較文明学会第32回大会

シンポジウム「文明交流と日本文明」

於：西南学院大学

---

スライド 17

参考文献

高橋「中ノ島から文明を考えた」『比較文明研究』第12号 龍谷大学比較文明文化研究センター 2007年

高橋「近代以降の文明史研究」『世界』2004年

高橋「文明の交流史観」『ネット』2004年

高橋「文明ネットワークの形成史」『世界』2005年

伊東俊太郎『比較文明』中央書院 龍谷大学出版部 2008年

スライド 18

参考文献

高橋「中ノ島から文明を考えた」『比較文明研究』第12号 龍谷大学比較文明文化研究センター 2007年

高橋「近代以降の文明史研究」『世界』2004年

高橋「文明の交流史観」『ネット』2004年

高橋「文明ネットワークの形成史」『世界』2005年

伊東俊太郎『比較文明』中央書院 龍谷大学出版部 2008年